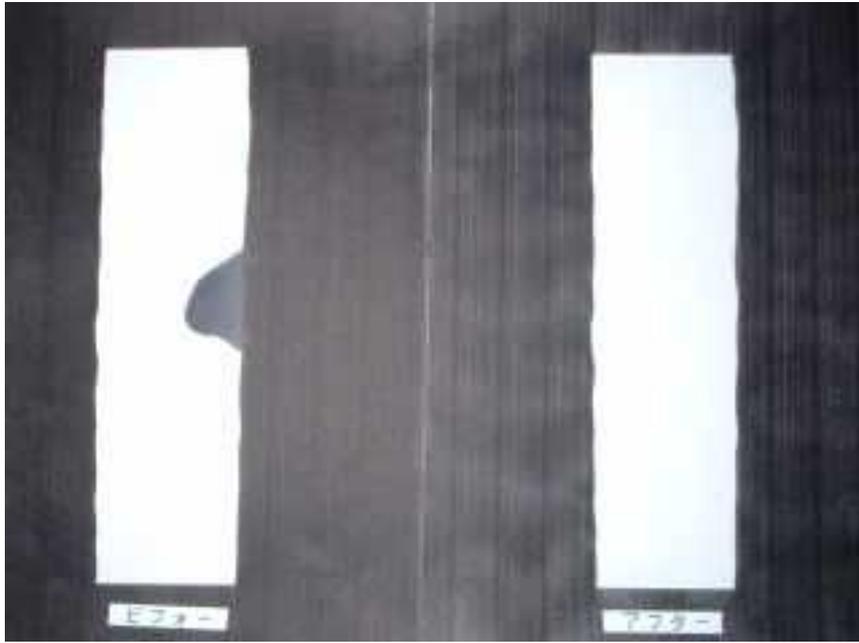


天の声・・・松田龍泉



「今死ぬとしたら、思い残すことはあるか？」いきなりこんな言葉が聞こえてきた。「えっ・・・」ふいの言葉にちょっと、とまどった・・・。

4月の、ぽかぽか陽気の朝の通勤途上、駅から、職場に向かう20分程の専用歩道「ふれあいの小道」を歩いていた時、こんな言葉が聞こえてきた。

「そうですねー、・・・一番気懸かりなのは、学業途上の次男だが、保険と退職金で大學までは行けるだろう。その先は父親がいなくても、長男が相談にのってくれるだろうし、なんとでもなるだろう」「長男夫婦は、米国の大學で順調に学者への道を歩んでいる」「妻のことはまったく心配ない」「これまでの人生を、怖いものも無く、自分の思い通りに、しかも2倍生きてきた」これらの言葉が数秒で頭の中を駆け巡った。

「思い残すことはありませんね」と言った、そう言い切れるほど、自分の人生に悔いはなかった。今頃、意識もしていないのに、なぜ、こんな声が聞こえてきたのか、不思議に思った。見上げると、雲がひとつポツカリと浮かんでいた。

2000年は平穏に明けた。仕事も順調、家族も平穏無事にそれぞれの道を歩んでいる、生活になんの不安もなく過ごしている。そんな年だった。

1月、還暦を迎えた、家族でのそんな祝いも、それほど大きな感慨もなく、ただの通過点のようにすぎた。

5月には長男夫婦が揃って、博士課程を修了し、二人は、それぞれ、米国の大学教員の職についた、との知らせがあった。

そのころから、時々胸にふっと軽い痛みを感じるようになった。いままで病気をしたこともなく健康で頑健な身体だったので、もしや大病の兆しではないか？そのうち精密検査を受けなければ、と思っていた。

8月31日妻は1泊旅行に出掛けていた。その日、友人と呑んだ。紹興酒を2瓶あけたので、酒量はいつもより少し多かったか？

いつものように帰って、風呂に入り、11時過ぎベッドに入った。2時ごろ珍しく目が醒めた、胸が痛い、今まで経験したこともない痛みがきた。寝室から出て、しばらく居間のソファーにもたれていたが、「もしや大病ではないか？」と不安になり救急車を呼んだ、掛かりつけの病院とて無かったので、救急車に任せると、S医大病院に連れていかれた。

集中治療室で、CT/MRI/レントゲン/心電図・・・心臓・肺・大動脈・胸周りのあらゆる検査をして、待っているうちに胸の痛みもやわらいできた。夜も明けて、病院が開業のあわただしさをむかえるころ、検査結果を告げにきた若い医師は首をかしげている。「どこも、わるいところはありません・・・」循環器には異常の無いことは確認できたが、「かなり前から、時々、胸に・ふうっと小さな痛みがあること、急いで食べ物を呑み込むと喉につかえることがあること」を訴え、消化器の検査をたのんだ。

妻は朝旅行先から家に電話して、次男から私が救急車で運ばれたことを聞き、朝食もとらず、新幹線で病院にかけつけてくれた。その日は役員会であった、病院の電話で休むことを総務部長につげた。その日は休んだが翌日からは、なんでも無かったかのように出勤した。

数日後食道・胃の内視鏡検査を受け、1週間ほどして結果を聞いたところ「食道に異型性の組織がある、放置しておくとう癌になる可能性がある」との診断結果がでた、内視鏡手術を受けることにしたが、ベッドに空きが無く入院は12月中旬と言う。

4月の歩道で聞こえてきたのは・・・あれは「天の声」だった。
あの時、癌ができたに違いない・・・しかも親切に教えてくださったのだ・・・。

社長にM病院を紹介してもらい、すぐに、病院へ行き、数日後内視鏡検査を受け「食道前期癌」の診断。内視鏡手術を受けることにし、10月下旬入院を

決めた。日曜日入院、月曜日手術、入院即手術は少ない一週間位は検査がある。幸い事前の検査で、血圧、血糖値、その他の検査指標に異常はなかった。

執刀は食道癌の権威、K医師。立ち会った看護師は、手術が無事成功したことを「きれいにとれた・・・」といて帰ってきた。手術2日目、喉から胸が痛む、春から胸にふっと感じた軽い痛み、救急車で運ばれた時のもの、あれらと同じ痛みだ。喉の粘膜が薄いビニル膜をビリッと破いたようになった写真を後で見せられたが、これは痛いわ！とおもった。3日目になると、痛みもおさまった。回復は順調と主治医は言った。金曜日午前中退院。金曜日の午後総務部長が見舞いに來たが、退院した後であった。見舞いの空振りと大病にしては早い退院におどろいていた。退院した翌日の土曜日はさすがに控えたが、日曜日に酒を飲んでみた、喉に沁みることもなく、うまかった。ガンは大病というが、こんな経過で自分では大病の自覚がない。

K医師は「癌組織は全部とれた、手術は成功したが、組織が粘膜をこえてリンパ線部分まで侵入していた、リンパに転移の可能性が2割ある」「この時点で1、リンパ腺をとる。2、抗がん剤を飲む。3、なんにもしない。3つの選択肢がある。1はあまり薦めない」といわれ「3を選びたい」とこたえ、4ヶ月ごとの検診（内視鏡・CT検査）を受けることにした。

この年12月、奥飛騨に旅行をした。飛騨側から見る穂高はとても美しかった。2001年21世紀を平穩に迎えた。4月「内視鏡検査は異常なし」であった。歴史が好きな私に、妻はローマ時代からの歴史あるイタリア旅行を誘ってくれた。私の病が一筋縄ではいかぬものであることを察し、楽しい思い出をつくろうとの妻の配慮だった。ミラノ、ベローナ、ベニス、シエナ、ピサ、フィレンツェ、アッシジ、ローマ、ポンペイ、ナポリ、ソレント、カプリ、ロ-マとイタリアの主要都市をめぐるツアーは、とても楽しい思い出を作り、私にあらたなパワーを与えてくれた。この旅行の費用も保険金でまかかった。

9月の検査で食道リンパ節への転移がみとめられた。念の為と医師の薦めもあり、まだ健康保険が使えない「PET」検査も受けた。名医の執刀など、最高の医療を受け、健康保険が使えない高額な検査を受けたこと、その後の検査も健康保険外の検査を定期的に受けられたのも、N社の生命保険とA社のガン保険のお蔭だった。幸い癌は食道のリンパだけとハッキリした。「放射線治療」と治療方針を決め放

放射線治療では有名なK病院へ紹介された、入院は10月と医師は言う、10月には資格試験の日程が入っている「もう少し遅らせませんか」「癌はすぐ大きくなる、それはだめですな」「入院中試験を受けに行ってもいいですか?」(行けるものなら行けば)と言うように「どうぞ」といった。あとで知ったが抗がん剤を入れ、放射線治療を受けるのはとても苦しいことで「そんな状態で試験など受けにいけないだろうと思った」とあとで医師はいった。

10月放射線治療を受けるべくK病院に入院、1週間は検査、2週間目から放射線治療が始まり放射線照射2週間が終わった日曜日、試験を受けにいった。妻の作ってくれた弁当のご飯がとても硬い、こんな硬い飯は妻にしては珍しいといぶかりながらも全部食べきれず、少し残した。

後で分かったのだが、ご飯が硬いだけでなく、放射線のため、のどが炎症をおこして異常になっていたのだ。

そして、放射線照射4週目が終わって、喉のレントゲン検査を受けたところ、驚異的なことがおこった。N医師が喉のレントゲン写真を治療前、治療後の2枚を並べて見せてくれた。治療前にあった食道のへこみが、まったく消えていた。そのへこみは、リンパの癌が食道を押ししていたもので、それが無くなったということは、癌が消えたか、小さくなったことだった。N医師は女性の研修医だが「こんな劇的な変化の症例は初めてです」といった。

冒頭の写真は、その時のイメージを描いて写真にしたもので左はビフォー右がアフター。

通常、放射線治療は人体の受ける放射線量の限度を設け、一般には6週間ときめられている、4週間で検査し、その時点で治療効果が見えないとそこで放射線治療は打ち切られる。同室で同じく食道癌で放射線治療を受けていた人は4週間照射を受けて「効果なし」といわれて、しょげかえって退院していった。私はその後の2週間も治療を続けた。

私の人生のなかで、50日の入院は始めてだった。この入院中闘病生活を規則正しくすることを心がけた「いわゆる昼間からベッドでごろごろしてテレビを見る病人にならない」ことを心掛けた。入院中は抗癌剤の点滴が24時間ついている。

朝は6時起床、洗面のあと7時に売店で朝刊とりんごと牛乳を買い、りんごを食べ牛乳を飲み朝刊を読む、朝食後午前中は試験勉強、昼食後は長男夫婦が贈ってくれたCDプレイヤーで音楽を聴く、TVは夕方のNHK7時のニュースから、気に入った映画があるときは、11時まで、普段は9時就寝。昼間はベッドでごろごろせずに、椅子で生活することを心掛けた。

さすがに病院では飲まなかったが、土、日の一時帰宅では必ず晩酌をした。酒を呑むことは医師にも告げた「度をすぎさないように」といったが止めはしなかった。そして50日の入院生活は終了した。

この年5～7月にも、もう一つの試験も受けていた。入院中に受けた試験とあわせ2つとも翌年合格発表があった。

その後しばらくして、もう一度「天の声」を聞いた、愛犬のボブと公園を散歩していたとき、今度は私から話しかけた「宝くじ、当ててくれませんか？」いままでジャンボ宝くじだけは連番10枚買っていたが、300円以外一度も当たったことはなかった。・・・「だめだ」「どうしてですか？」「金に困ってないだろう」そういわれると確かに金に困っているわけではない「それじゃ宝くじ買うのはやめます」「だめだ買え」「えっつ・・・なぜですか？」「当たらないものが買わないと金が世間にまわっていかない」天とのそんな会話があつて、いまでもジャンボ宝くじ10枚だけは買っている。ボブは怪訝な顔で私を見上げている、彼にはこの会話が聞こえていたのだろう。

天も粋なことをするもので、その後3,000円が2度あつた。それからは天に「宝くじ当ててください」とはもう言わない。天の答えはわかっているからだ。

もうすぐ5年が経とうとした、2005年3月の検査でまた、食道に異常が見つかった、5月入院して内視鏡手術を受け1週間で退院した。こんどは「癌は粘膜内に収まっており、転移の危険はなく完治」とK医師の診断だった。

2006年〇県へ引っ越したので、M病院から大阪のH病院へ紹介してもらい、8月内視鏡検査を受けた。2週間後検査結果を聞きにいくと「食道が荒れている、疑わしいところも在る、また手術しますか？」と言いつつも「胃液が上がってくることも影響しているので、内科とも相談し、それを薬で治す方法をしばらく続けましょう」といわれた。

これを聞いたとき、酒をやめようと決心した。酒は若いときから呑んでいたが、ここ20年位は酒量も落ち着いてきた、付き合いで飲むときは制限なく呑んだが、家では、昼2合、晩酌4合を目安にしていた。

外で結構呑みながらも家では週に3本一升瓶が空いていた。休日には一日で一升瓶が空くことは珍しいことではなかった。酒屋が「呑みすぎ！」と言う程だった。妻は「酒屋に呑みすぎと言われちゃおしまいね」とからかった。この酒をやめようと決心した。

医師が患者のことを思って、手術をしない方法で治療してくれるという、これに患者が応えないと申し訳ないと心底思った。前の手術から1年で手術になるかも知れないといわれたことも少しはこたえた。

この日、家に帰って妻に「酒をやめる」と宣言した。家に酒が無くはなかった、それは、妻の料理用にするようにいった。

10月再度内視鏡検査をうけた「食道はきれいになっている、薬と禁酒がきいている」といわれた。医師は「酒を呑んでもいいんですよ」と言ってくれるが、自分のことだから、呑まないようにしている。

今は、付き合いで呑むことは殆どないが、あれば、ほどほどにお付き合いはしている。家では、「はれ」の日に一杯だけ飲むことにしている。

そして、その後も半年に一度は内視鏡とCTの検査をうけているが、今のところ異常はない。

2009年4月の検査結果を聞いたとき、医師は「薬と酒を控えているのが効果をだしている、異常はありません」「もうすぐ5年になる、このままの状態なら、検査しなくてもよくなるだろう」といつてくれる。

いま、健康状態はどこも異常はない。好きな山登りもしている、今年は北アルプス「白馬岳」に登った。(白馬岳紀行)

そして、ついに劇的な日がやってきた2009年10月7日先日受けた内視鏡検査の結果を聞きに行った。医師は「食道はきれいです、異常ありません」「先生、CT検査をしていませんか?」「それは1年ごとでいいでしょう、前回異常は無かったので、内視鏡も一年間隔でいいですよ」「これからは一年に一回位一般の健康診断とガン検診を受ければいいでしょう」と言われた。

計算書の下の次回来院予約欄は空白になっていた。10年の闘病は終わった。

なんとも複雑な喜びがこみあげてきた。梅田で乗り換えのついでに「たこ梅」のおでんでひとりひっそりと祝杯をあげた。

帰って話すと、晩酌が一本ついて、妻が「おめでとう」と言ってくれた。

この次「天の声」は、いつ、どんなことを言ってくるのだろう・・・???

副題「我が闘病」